

▲▽▲▽御船印めぐりの旅▲▽▲▽ 南海フェリー株式会社 「フェリーあい」に乗船 徳島港～眉山・阿波おどり会館を歩く

紀伊水道を横断し和歌山港と徳島港を結ぶ南海フェリー株式会社。今回は和歌山港で「フェリーあい」に乗船し徳島港に向かった。「フェリーあい」は、和歌山港～徳島港間を往復する旅客船兼自動車航送船として建造され、2機2軸推進方式、双胴型船尾船型による省エネ化を実現している。快適な船旅を楽しめるよう、航海船橋甲板上煙突内に減揺装置を装備（タンク内の流体の移動により船の横揺れを軽減）することで、安全で快適な乗り心地を実現し、効率的な荷役を考慮した船首・船尾のランプウェイ、そして航海中は紀伊水道を一望できる展望デッキもある

▽徳島を歩く＝眉山からの夜景

徳島のシンボリックな存在感を示す眉山。眉山からの夜景は日本の夜景百選にも選ばれ、四国一ともいわれる夜景のスポット。麓にある眉山ロープウェイ山麓駅からは、眉山頂上駅まで約6分で到達する。

万葉集に詠まれている、その名のとおりなだらかな眉の形をなす眉山の標高は290mで、山頂からは天気良ければ徳島市街をはじめ、淡路島、和歌山までを一望できる。

▽阿波おどり会館で踊りを体感

400年以上の歴史を持つといわれる阿波踊り。起源については諸説あり、広く知られているのが、1586年に蜂須賀家政によって徳島城が落成した際、祝賀行事の無礼講として城下の人々が踊ったとする「築城起源説」。また、鎌倉時代の踊り念仏が盆踊りとして伝わり、さまざまな形で変化した「盆踊り説」もある。真実は不明だが、江戸時代には徳島城下の盆踊りとして存在していた。

江戸時代の盆踊りは「組踊り」「ぞめき踊り」「^{にわか}俄踊り」の3形態があり、徳島城下ではせりふや音楽などで構成される歌舞劇「組踊り」が主流となっていた。「組踊り」が登場する最古の史料は、1756年の御触書で、「組踊りを禁止する」というもの。徳島藩では踊りの熱狂が一揆につながることを懸念し、武士が庶民の踊りに参加するのはタブーとされた。町内が毎年趣向をこらすため華美・豪奢になりがちな「組踊り」は、奢侈禁止(贅沢を禁止して儉約を推奨する)の立場である藩として認めるわけにいかず、しばしば組踊りを禁止している。

藍商人が文化交流の担い手として各地の踊りや音楽を徳島に持ち帰り、時代ごとに変化しながら伝統芸能として定着し、明治時代中期になると、輸入染料に押されて藍産業が衰退。盆踊りのメインスポンサーであった藍商人の経済力が沈下し、「俄踊り」が衰退した。その一方で、「ぞめき踊り」がお囃子とともに町に繰り出す行進型に変化。これが、現在の阿波踊りの直接的なルーツである。

明治時代までの盆踊りは「見ること」「見られること」より「参加すること」が主体だったが、大正時代になると少しずつ観光化が進み、参加者が「見られる踊り」を意識するようになった。現在の「阿波踊り」という名称が使われるようになったのは昭和に入ってからで、この名称も観光資源として全国に広まるきっかけとなった。1937～1945年は戦争のため中断を余儀なくされたが、終戦後の1946年に復活した。

▽大鳴門橋架橋「渦の道」

橋桁空間を利用して造られた海上遊歩道。入口から先端の展望室まで、風光明媚な鳴門海峡の景色を楽しめる。

◇◇◇◇◇◇◇◇ 一般社団法人日本旅客船協会の公認事業「御船印めぐりプロジェクト」 ◇◇◇◇◇◇◇◇
プロジェクトに参加する船会社のオリジナルの御船印帳・御船印紙を購入し、参加会社の船や航路ごとに発行するさま

ざまな御船印を集めることができる。

御船印とは、神社仏閣めぐりで集められる御朱印の船バージョン。日本各地の船をめぐる船旅の楽しみをさらに盛り上げるため、客船や観光船などに乗船した際、船旅の思い出を彩る記念の押印（スタンプ）をいただくもの。

「海員だより」